ビデオ エンドポイントのトラブルシューティング ワークフロー

このセクションでは、次の点について説明します。

- ビデオ エンドポイントのトラブルシューティング ワークフロー （1 ページ）

ビデオエンドポイントのトラブルシューティングワークフロー

Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

このセクションを確認する前に、Cisco Prime Collaboration Assurance の検出ワークフローを理解しておく必要があります。デバイスの検出プロセスの詳細については、『Cisco Prime Collaboration Assurance ガイド - Advanced, 11.x』の「デバイスの検出」セクションを参照してください。

トラブルシューティングのワークフローでは、[] [] ページで [システムステータスのポーリング間隔（System Status Polling Interval）]、[フロー統計のポーリング間隔（Flow Statistics Polling Interval）] に対して定義された値に基づいて、デバイスがポーリングされます。

トラブルシューティング ワークフロー中、エンドポイントおよび会議デバイスのステータスをチェックするため、それらのポーリングが 1 分間隔で行われます。

ネットワーク デバイスに関する詳細（CPU 使用率、メモリ使用率、インターフェイスなど）を表示できます。

（注） Cisco Prime Collaboration Assuranceを MSP モードで導入している場合、会議のトラブルシューティングはサポートされません。

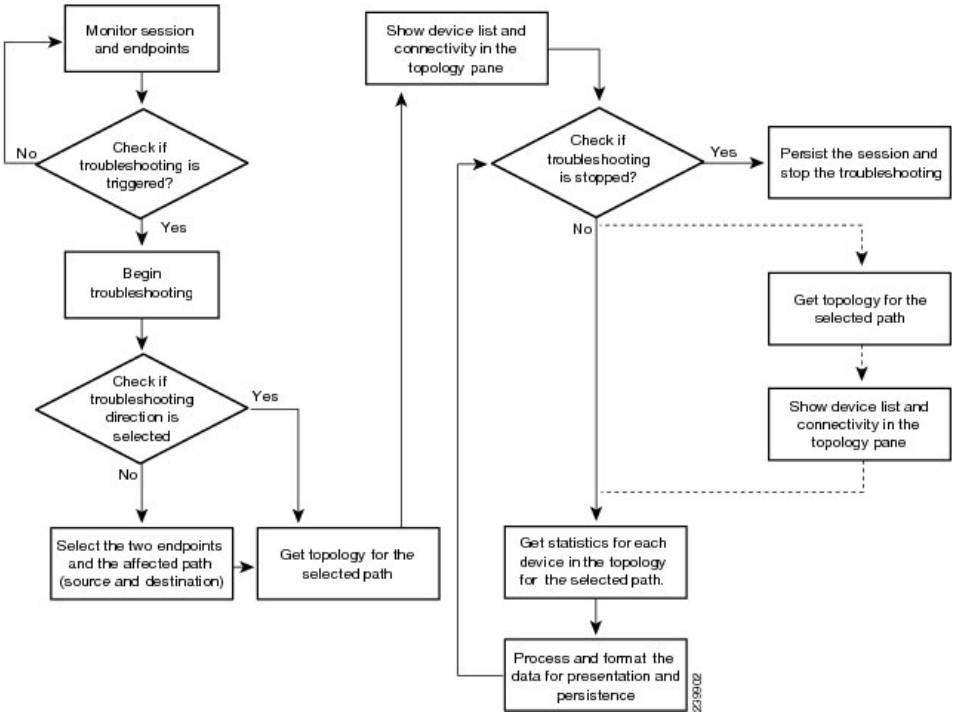
トラブルシューティング ワークフローは、Cisco Prime Collaboration Assurance システムのパフォーマンスに影響を与えます。ウォッチ リストに会議またはエンドポイントを追加するのは、必要な場合だけにしてください。

ビデオ エンドポイントのトラブルシューティング ワークフロー

会議のトラブルシューティング ワークフローを次に示します。

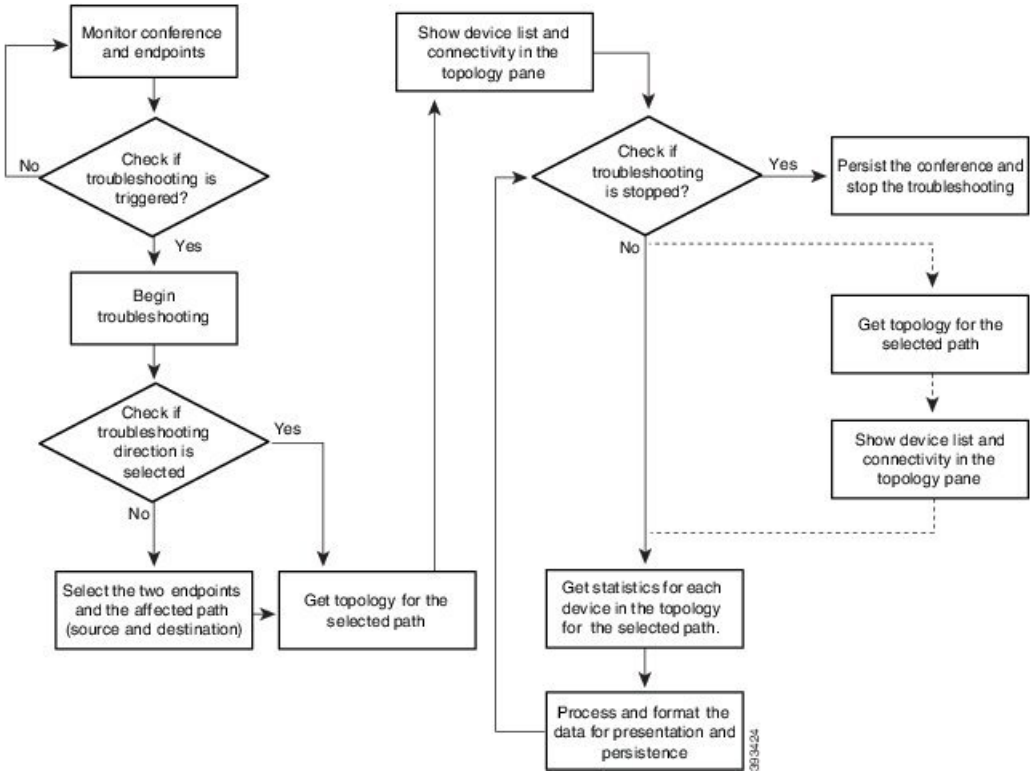
Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以前の場合

図 *1:* セッションの トラブルシューティング ワークフロー



Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

図 *2:* 会議のトラブルシューティング ワークフロー



関連トピック

デバイスの検出

トラブルシューティング ワークフローの機能

次に、トラブルシューティング ワークフローの主な特徴を示します。

- トラブルシューティングは自動または手動で開始できます。
  - 自動トラブルシューティングは、会議を監視リストに追加すると起動されます。
  - 自動トラブルシューティングは、エンドポイントの 1 つが監視リストに含まれている場合に起動されます。トラブルシューティング ワークフローは、エンドポイントが監視対象状態になっている場合に限り開始できます。
  - 自動トラブルシューティングは、パケット損失、ジッター、または遅延アラームの値が定義済みのしきい値を超えると起動されます。これは、ポイントツーポイント会議のみに適用できます。
  - 自動トラブルシューティングは、パケット損失、ジッター、または遅延アラームがマルチポイント 会議で発生する場合は起動されません。
  - 手動トラブルシューティングは、[会議（Conference）] ページから開始できます。

会議およびエンドポイントのトラブルシューティング ワークフローを開始する方法の詳細については、「トラブルシューティング ワークフローの開始 （8 ページ）」を参照してください。

- 2 つのエンドポイント間でパケット損失、ジッター、または遅延アラームが存在するとき、自動トラブルシューティングに対して設定されている場合はトラブルシューティング ワークフローが開始されます。このアラームがクリアされると、トラブルシューティング ワークフローは停止します。
- 双方向の 2 つのエンドポイントの間でトラブルシューティングがサポートされています。トラブルシューティング ワークフローを手動で開始する場合は、エンドポイント間のトラブルシューティングの方向を選択できます。
- エンドポイントと Cisco MSE との間ではトラブルシューティングがサポートされています。トラブルシューティングは、ビデオ エンドポイントから SBC への方向で行われ、その逆方向では行われません。
- エンドポイントと Cisco TelePresence Server との間ではトラブルシューティングがサポートされています。トラブルシューティングは、エンドポイントから Cisco TelePresence Server への方向で行われ、その逆方向では行われません。
- エンドポイントと Cisco MSE との間ではトラブルシューティングがサポートされています。トラブルシューティングは、エンドポイントから Cisco MSE への方向で行われ、その逆方向では行われません。
- エンドポイントと Cisco VCS との間ではトラブルシューティングがサポートされています。トラブルシューティングは、エンドポイントから Cisco VCS への方向で行われ、その逆方向では行われません。
- 状態が [Unknown] であるエンドポイントについては、既知のエンドポイントからこの不明なエンドポイントにトラブルシューティングできます。マルチポイント会議でも、同じ方法でトラブルシューティングを行うことができます。
- トラブルシューティング ワークフローは、開始時から最長 4 時間実行されます。トラブルシューティング ワークフローがこの時間内に終了しない場合は、Cisco Prime Collaboration Assurance はワークフローを自動的に終了します。
- 最大 50 個の同時トラブルシューティング ワークフローが一度に存在できます。使用できます。

  この制限を超えると、トラブルシューティング ログ ファイルにエラー メッセージが表示されます。

会議のトラブルシューティング ワークフローの機能

次に、スケジューリングされた会議が監視リストに追加された場合のトラブルシューティング ワークフローの主な動作を示します。

- 自動トラブルシューティング ワークフローは、監視リストに追加されるすべての会議で開始されます。

- マルチポイント会議では、トラブルシューティングは、エンドポイントが会議に参加するとすぐに開始されます。
- マルチポイント会議では、エンドポイントのトラブルシューティングが停止されると、トラブルシューティング ワークフローは、会議内の他のエンドポイントについて続行されます。このエンドポイントのトラブルシューティングは手動で開始する必要があります。
- マルチポイント会議では、問題が原因でエンドポイントが再開されると、会議への参加後に、このエンドポイントの新しいトラブルシューティング ワークフローが起動されます。会議内の他のエンドポイントに影響はありません。
- 監視リストから会議が削除されると、次の条件では、関連付けられたトラブルシューティング ワークフローは停止します。
  - その会議についてトリガーされたパケット損失アラーム、ジッターアラーム、および遅延アラームがない。
  - 手動で起動されたトラブルシューティング ワークフローがない。
- パケット損失、ジッター、または遅延アラームが原因でトラブルシューティング ワークフローが起動された場合は、次の条件では、パケット損失、ジッター、または遅延アラームがクリアされると、トラブルシューティング ワークフローは停止します。
  - 会議が監視リストに追加されていない。
  - 手動で起動されたトラブルシューティング ワークフローがない。
  - トラブルシューティング ワークフローを手動で停止した、または会議が終了した。
- 手動で起動したトラブルシューティング ワークフローは、手動で停止する必要があります。それ以外の場合は、会議が終了すると停止します。
- 会議を再度監視リストに追加すると、新しいトラブルシューティング ワークフローが開始されます。

エンドポイントのトラブルシューティング ワークフローの機能

トラブルシューティング ワークフローは、エンドポイントが監視対象状態になっている場合に限り開始できます。次に、エンドポイントが監視リストに追加された場合のトラブルシューティング ワークフローの主な動作を示します。

- エンドポイントの自動トラブルシューティングは、その会議に参加するとすぐに開始されます。（監視リストに追加された）エンドポイントに関連付けられた会議のトラブルシューティング ワークフローを停止できます。この会議のトラブルシューティングは手動で開始する必要があります。
- 会議中に、エンドポイントが監視リストから削除されると、そのエンドポイントのトラブルシューティングは停止します。

- 会議および関連付けられたエンドポイントが管理リストに属している場合に、エンドポイントが監視リストから削除されると、そのセッションのトラブルシューティング ワークフローは、会議が終了するまで続行されます。
- 会議および関連付けられたエンドポイントが監視リストに属している場合は、会議が監視リストから削除されると、そのエンドポイントのトラブルシューティング ワークフローは、エンドポイントが会議から切断されるまで続行されます。つまり、会議とエンドポイントが監視リストに属している場合は、エンドポイントにより高い優先順位が付けられます。
- MRA エンドポイントでは、トラブルシューティング用の脚は表示されません。非 MRA エンドポイントでは、トラブルシューティング ワークフローは、Cisco Collaboration Edge を使用して、エンドポイントから Cisco VCS に対して行われます。

発信元と宛先のエンドポイントをトラブルシューティングするためのサポートマトリクス

次の表には、発信元エンドポイントと宛先エンドポイントの間のトラブルシューティング サポートの詳細を示してあります。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以前の場合

（注）
- マルチポイント コールでトラブルシューティングを実行する場合は、ソース デバイスの最初のホップ ルータ/スイッチ（MCU など）に CLI アクセスがあることを確認します。
- Mediatrace 統計については、次の点を確認します。
  - 接続元または接続先デバイスで 5 タプル（送信元アドレス、送信元ポート、宛先アドレス、宛先ポート、プロトコル）が使用可能である
  - パスには Mediatrace イニシエータがあり、Mediatrace バージョンは 1.0 または 3.0 です（2.0 はサポートされていません）。
- MCU、CTMS、MXP、E20 などのデバイスでは、5 タプルは使用できません。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以前の場合

送信元	接続先
CTS	CTS、CTMS、C_CODEC、TPS、CIUS、MXP、IP フォン、Cisco Jabber、、E20、ルータ
C_CODEC	CTS、CTMS、VCS、C_CODEC、TPS、CIUS、MXP、IP フォン、Cisco Jabber、MCU、、E20、ルータ、
Cius	CTS、CTMS、C_CODEC、TPS、CIUS、MXP、IP フォン、Cisco Jabber、MCU、E20

送信元	接続先
MXP	CTS、CTMS、VCS、C_CODEC、TPS、CIUS、MXP、IP フォン、Cisco Jabber、MCUE20
電話	CTS、CTMS、VCS、C_CODEC、TPS、CIUS、MXP、IP フォン、Cisco Jabber、MCUE20
Cisco Jabber	CTS、CTMS、VCS、C_CODEC、TPS、CIUS、MXP、IP フォン、Cisco Jabber、MCUE20
POLYCOM	CTS、（CTMS）、VCS、C_CODEC、TPS、CIUS、MXP、MCU、IP フォン、Cisco Jabber、MCU、、E20
E 20	E20、CTS、（CTMS）、VCS、C_CODEC、TPS、CIUS、MXP、MCU、IP フォン、Cisco Jabber、MCU、
スイッチ	スイッチ、ルータ
ルータ	スイッチ、ルータ、C_CODEC、MCU、TPS、（CTMS）
VSAA	VSAA
CTMS	CTS、ルータ
MCU	C_CODEC、E20、MXP、CUIS、IP フォン、Cisco Jabber、、ルータ
TPS	C_CODEC、E20、MXP、CTS、CUIS、IP フォン、Cisco Jabber、、ルータ
VCS	C_CODEC、E20、MXP、CUIS、IP フォン、Cisco Jabber、

Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

送信元	接続先
Cisco エンドポイント	Cisco エンドポイント、MCU、TP、仮想 TP、VG、CUBE、VCS、Expressway-Core、不明なエンドポイント

（注）

- Cisco Prime Collaboration Assurance は、ソース デバイスが 5 タプルの情報を含む Cisco エンドポイントである場合のみ、トラブルシューティングをサポートします。
- Cisco Prime Collaboration Assurance は、Cisco Jabber エンドポイントのトラブルシューティングはサポートしていません。

トラブルシューティング ワークフローの開始

[会議の診断（Conference Diagnostics）] ページの [360° 会議ビュー（360° Conference View）] から、会議のトラブルシューティング ワークフローを開始することができます。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以前の場合

（注）トラブルシューティングの時間を短縮するため、トラブルシューティングを開始する前には、メディア パスにあるデバイスを検出し、**[インベントリ（Inventory）]** で使用可能にしておくことを推奨します。

[エンドポイントの診断（Endpoint Diagnostics）] ページのクイック ビュー ウィンドウから、エンドポイントのトラブルシューティング ワークフローを開始できます。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

表 *1:* トラブルシューティング ワークフローの起動ポイント

トラブルシューティング タイプ	起動ポイント
自動	**1.** **[診断（Diagnose）]** > **[会議の診断（Conference Diagnostics）]** の順に選択します。 **2.** スケジュール済みの会議を選択します。 **3.** [ビデオ コラボレーション 会議（Video Collaboration Conference）] テーブルの [会議の件名（Conference Subject）] カラムにマウス ポインタを合わせ、[360° 会議（360° Conference）] ビュー アイコンをクリックします。 **4.** [Add to Watch List] をクリックします。

トラブルシューティング タイプ	起動ポイント
自動	**1.** **[診断（Diagnose）] > [会議の診断（Conference Diagnostics）]** の順に選択します。 **2.** [Not In Use] 使用ステータスになっているエンドポイントを選択します。 **3.** [List of Endpoints] テーブルの [Endpoint Name] 列の上にマウス ポインタを置いて、表示されるクイック ビュー アイコンをクリックします。 **4.** [Add to Watch List] をクリックします。 エンドポイントが会議に参加すると、トラブルシューティング ワークフローがすぐに開始します。
手動	**1.** **[診断（Diagnose）] > [会議の診断（Conference Diagnostics）]** の順に選択します。 **2.** 進行中の会議を選択します。アラームが設定された進行中の会議を選択することを推奨します。 **3.** [ビデオ コラボレーション 会議（Video Collaboration Conference）] テーブルの [会議の件名（Conference Subject）] カラムにマウス ポインタを合わせ、[360° 会議（360° Conference）] ビュー アイコンをクリックします。 **4.** アイコンをクリックして [Troubleshooting] ページを起動し、トラブルシューティングを開始する方向を選択します。

トラブルシューティング タイプ	起動ポイント
手動	**1.** **[診断（Diagnose）] > [会議の診断（Conference Diagnostics）]** の順に選択します。 **2.** [In Use] 使用ステータスになっているエンドポイントを選択します。 **3.** [List of Endpoints] テーブルの [Endpoint Name]列の上にマウスポインタを置いて、クイック ビュー アイコンをクリックします。 **4.** [Add to Watch List] をクリックします。 トラブルシューティング ワークフローが即時に開始されます。

データ分析のトラブルシュート

会議またはエンドポイントで手動または自動のトラブルシューティングがアクティブな場合は、進行中の会議、ならびに完了した会議の両方で、トラブルシューティングデータを表示できます。

トラブルシューティング ジョブが完了すると、次のデータが表示されます。

トラブルシューティング

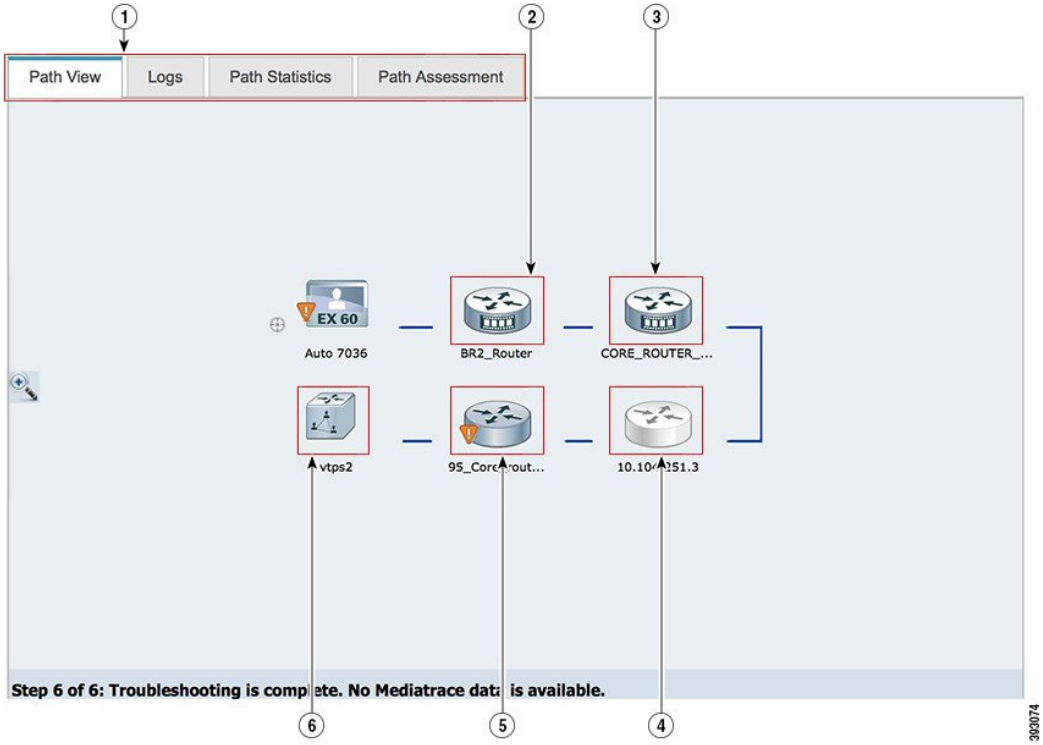
[パス ビュー（Path View）] タブでは、選択した方向のエンドポイント間のトポロジ（レイヤ 2 と 3）を表示できます。

- デバイス間を結ぶ線が直線の場合は、デバイスがお互いに直接接続されていることを示しており、。
- デバイス間を結ぶ線が点線の場合は、デバイスが接続されていない可能性があることを示しており、。

次の画像には、エンドポイント間にある会議のトラブルシューティングが示されています。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以前の場合

図 *3:* エンドポイント間のトラブルシューティング セッション



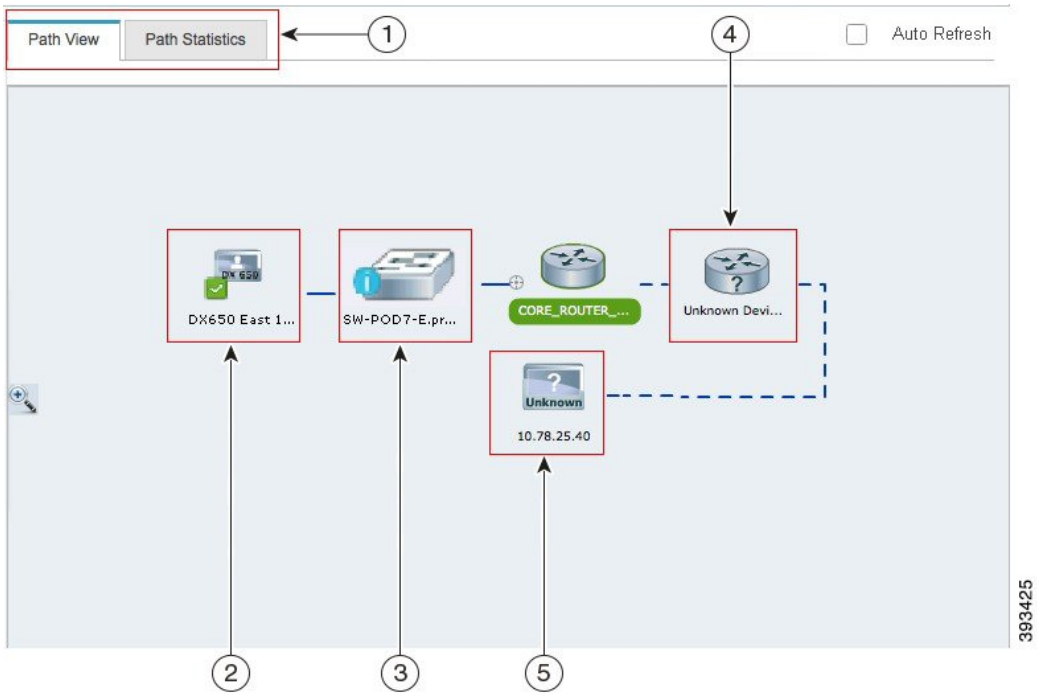
1	トラブルシューティング結果のタブ。 デバイスの設定（Mediatrace、Performance Monitor）によっては、一部のタブが表示されない場合があります。	2	Cisco Prime Network Analysis Module（Prime NAM）搭載のデバイスは、デバイス上に追加のバッジが付いて表示されます。アクセス不能なデバイスは、グレー表示になります。
3	Mediatrace がイネーブルになっているデバイスには、デバイス上に表示が追加されます。	4	アクセス不能なデバイスは、グレー表示になります。

5	エンドポイントに対するアラーム表示は、そのエンドポイントに障害があることを表します。	6	検出されたデバイス上の情報バッジは、メモリ、CPU使用率、またはコール品質統計（RTP パケット損失、RTP パケット ジッタ、DSCP）に問題があることを示しています。 コール品質統計および使用率（メモリおよび CPU）のしきい値は、[会議パスのしきい値設定（Conference Path Threshold Settings）]ページ（**[アラームとレポート管理（Alarm & Report Administration）] > [会議パスのしきい値設定（Conference Path Threshold Settings）]**）に定義されています。

デバイスがアクセス可能な場合は、マウスポインタをそのデバイス上に置き、クイック ビューアイコンをクリックすることで、システムおよびインターフェイスの詳細を表示できます。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

図 *4:* エンドポイント間にある会議のトラブルシューティング



1	トラブルシューティング結果のタブです。	2	トラブルシューティングを開始した元のエンドポイントです。

3	パスにあるミッドポイント（ルータまたはスイッチ）です。中点にある青のバッジは、しきい値がすべてのデバイスの Rx パケット損失、ジッタ、または遅延で設定された制限値を超えたことを示します。 しきい値は、[会議パスのしきい値設定（Conference Path Threshold Settings）] ページ（**[アラームとレポート管理（Alarm & Report Administration）]** > **[会議パスのしきい値設定（Conference Path Threshold Settings）]**）に定義されています。	4	Cisco APIC-EM によって識別されない不明なデバイスです。不明なデバイスには疑問符（?）が付いて表示されます。
5	送信先エンドポイントです。 Cisco Prime Collaboration Assurance は、通知先デバイスまたはエンドポイントが [Unknown] な状態であったとしても、トラブルシューティングをサポートします。		

Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

デフォルトでは、[会議のトラブルシューティング（Conference Troubleshooting）] ページは 30 秒ごとに自動更新されます。自動更新機能を無効にするには、[会議のトラブルシューティング（Conference Troubleshooting）] ページの右上隅にある **[自動更新（Auto Refresh）]** チェックボックスをオフにします。マウス ポインタをデバイスの上に置き、クイック ビュー アイコンをクリックすると、システム、インターフェイス、およびフローの詳細が表示されます。

次の表には、クイック ビューに一覧表示されるシステム、インターフェイス、フローの詳細が示されています。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以前の場合

表 *2:* システム、インターフェイス、およびフローの詳細

フィールド	説明
Hostname	デバイスで設定されているホスト名です。
IP Adress	デバイスを管理するために使用される IP アドレス。このリンクを使用して、エンドポイントまたはインフラストラクチャ デバイスのログイン ページを起動することができます。

フィールド		説明	
Mediatrace Capable この情報は、デバイス上で Mediatrace が有効な場合のみに表示されます。	Mediatrace Role	デバイスに Cisco Mediatrace ロールを設定します。	
	IP SLA Role	デバイスに IP SLA ロールを設定します。	
	Performance Monitor	設定済みの Performance Monitor です。	
システム ステータス	Physical Memory Utilization (in%)	物理メモリ使用率（パーセンテージ）。	
	CPU Utilization (in%)	CPU 使用率（パーセンテージ）。	
	インターフェイスの詳細	Operation Status	インターフェイスの管理ステータス。ifOperStatus オブジェクトで指定。
Input Metrics		表示されるデータは RFC1213 MIB 属性に基づく。	
Output Metrics		表示されるデータは RFC1213 MIB 属性に基づく。	
ネットワーク診断	これは、これらのデバイスを Cisco Prime Network Analysis Module（Prime NAM）または Cisco Prime LMS で管理する場合のみ表示されます。		

フィールド		説明
メディア のフロー情報	次の情報はデバイスのすべての管理対象コーデックの統合レポートです。この情報は、デバイス上で Mediatrace が有効な場合のみに表示されます。	
	DSCP	デバイス上に設定された DSCP 値。
	IP パケット ドロップ数（IP Packet Drop Count）	ドロップされた IP パケットの数。
	RTP Packet Loss	リアルタイム転送プロトコル（RTP）が示すパケット損失。
	RTP Packet Jitter (RFC 3550)	リアルタイム転送プロトコル（RTP）が示すジッター。
	Ingress Interface	入力インターフェイスの詳細。
	Egress Interface	出力インターフェイスの詳細。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

表 *3:* システム、インターフェイス、およびフローの詳細

フィールド		説明
Hostname		デバイスで設定されているホスト名です。
IP Address		デバイスを管理するために使用される IP アドレス。このリンクを使用して、エンドポイントまたはインフラストラクチャデバイスのログイン ページを起動することができます。
システム ステータス	Physical Memory Utilization (in%)	物理メモリ使用率（パーセンテージ）。
	CPU Utilization (in%)	CPU 使用率（パーセンテージ）。
インターフェイスの詳細	システム ステータス	インターフェイスの管理ステータス。ifOperStatus オブジェクトで指定。
	Input Metrics	表示されるデータは RFC1213 MIB 属性に基づく。
	Output Metrics	表示されるデータは RFC1213 MIB 属性に基づく。

フィールド		説明
メディア フロー情報 （注） –1 は、特定の統計データがプラットフォーム/デバイスから利用できないことを示します。		
	DSCP	デバイス上に設定された DSCP 値。
	IP パケット ドロップ数（IP Packet Drop Count）	ドロップされた IP パケットの数。
	RTP Packet Loss	リアルタイム転送プロトコル（RTP）が示すパケット損失。
	RTP Packet Jitter (RFC 3550)	リアルタイム転送プロトコル（RTP）が示すジッター。
	Ingress Interface	入力インターフェイスの詳細。
	Egress Interface	出力インターフェイスの詳細。

パス統計

パス統計ビューには、パス内の各ノードの統計情報が表示されます。

次のグラフには、パス統計ビューが表示されています。

CPU および メモリ

グラフにはすべてのデバイスが表示され、次の情報が含まれています。

- 縦軸（y 軸）は、過去 5 分間の CPU 使用率の詳細をパーセンテージで表します。
- 横軸（X 軸）にはパス トレースで検出されたネットワーク デバイスすべてがリストされます。
- グラフ内の球体は、プロセッサ メモリ使用率の詳細をパーセンテージで表します。球体のツール チップには、メモリ使用率の正確な値が表示されます。
- 球体の大きさは、プロセッサ メモリ使用率によって変化します。球体のサイズが小さい場合、プロセッサ メモリ使用率が低いことを示します。

球体（赤いアイコン）をクリックすると、システム、インターフェイス、フローの詳細が表示されます。

CPU and Packet Loss

このグラフは、すべてのデバイスに表示され、次の情報を含んでいます。

- 縦軸（y 軸）は、過去 5 分間の CPU 使用率の詳細をパーセンテージで表します。

- 横軸（X 軸）にはパス トレースで検出されたネットワーク デバイスすべてがリストされます。
- グラフ内の球体は、ビデオ パケット損失の詳細をパーセンテージで表します。
  - グリーンの球体は、ビデオ パケット損失がゼロであることを示します。
  - オレンジの球体は、ビデオ パケット損失が 1 % を超えることを示します。球体の大きさは、ビデオパケット損失によって変化します。球体のサイズが小さい場合、ビデオ パケット損失が少ないことを示します。

    球体をクリックすると、インターフェイス レベルでのパケット損失をより詳細に分析できます。
  - 青い正方形のボックスは、perfmon カウンタの統計情報がデバイスから利用できないことを示します。

図 *5 : CPU and Packet Loss* グラフ

球体または正方形のボックス（赤いアイコン）をクリックすると、システム、インターフェイス、および フローの詳細が表示されます。

Video IP Bit Rate and Packet Loss

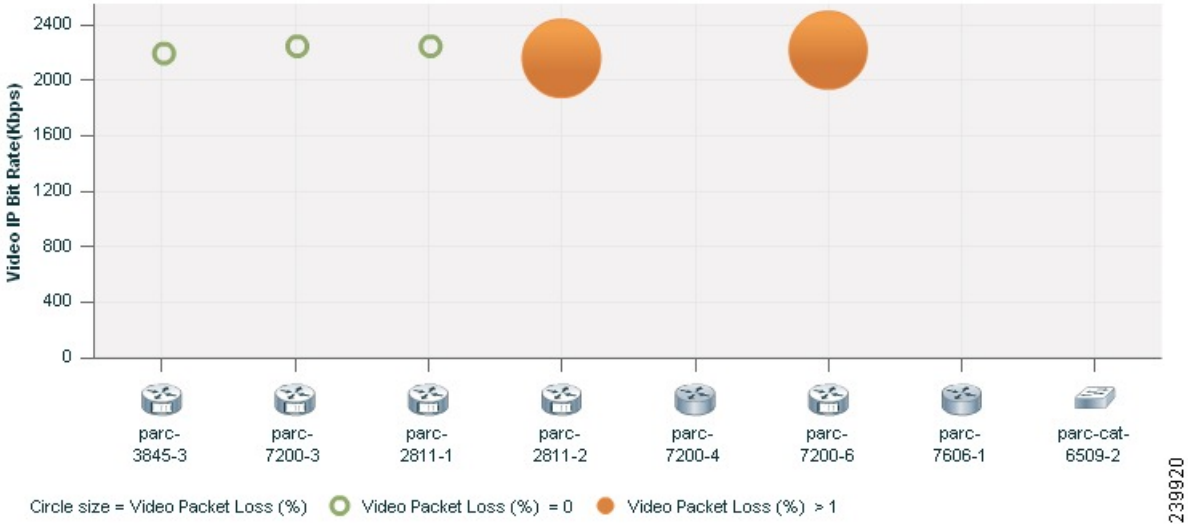
このグラフは、すべてのデバイスに表示され、次の情報を含んでいます。

- 縦軸（Y 軸）には、ビデオ IP ビット レートがキロビット毎秒（kbps）で表示されます。
- 横軸（X 軸）にはパス トレースで検出されたネットワーク デバイスすべてがリストされます。
- グラフ内の球体は、ビデオ パケット損失の詳細をパーセンテージで表します。
  - グリーンの球体は、ビデオ パケット損失がゼロであることを示します。

- オレンジの球体は、ビデオ パケット損失が 1 % を超えることを示します。球体の大きさは、ビデオパケット損失によって変化します。球体のサイズが小さい場合、ビデオ パケット損失が少ないことを示します。

  球体をクリックすると、インターフェイス レベルでのパケット損失をより詳細に分析できます。

図 *6 : Video IP Bit Rate and Packet Loss* グラフ



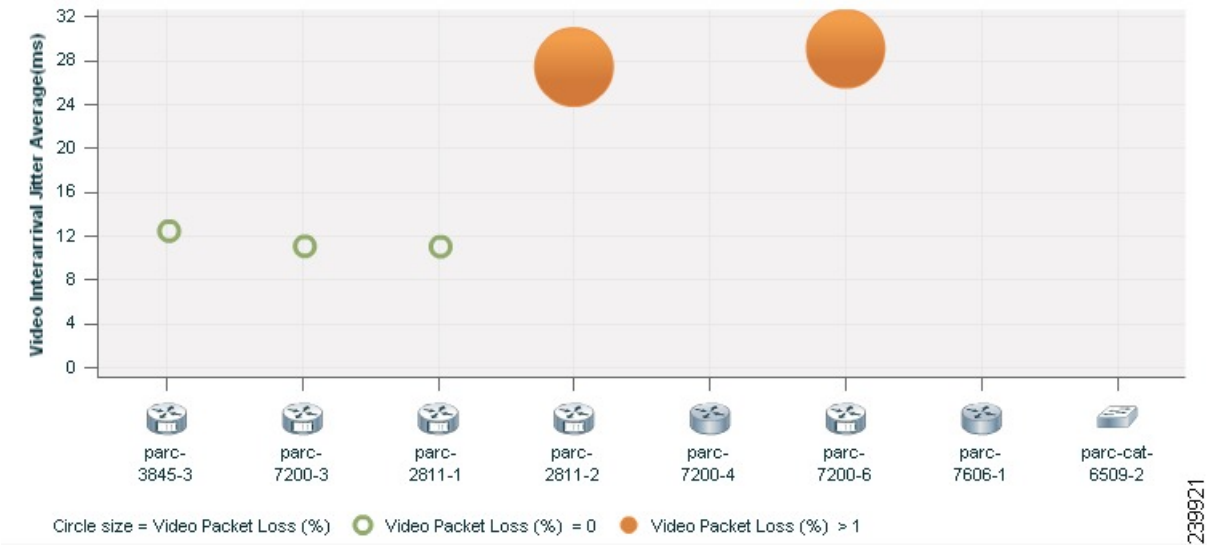
球体（赤いアイコン）をクリックすると、システム、インターフェイス、フローの詳細が表示されます。

Video Interarrival Jitter and Packet Loss

このグラフは、すべてのデバイスに表示され、次の情報を含んでいます。

- 縦軸（Y 軸）は平均ビデオ到着時間間隔ジッター値を示します（ミリ秒単位）。
- 横軸（X 軸）にはパス トレースで検出されたネットワーク デバイスすべてがリストされます。
- グラフ内の球体は、ビデオ パケット損失の詳細をパーセンテージで表します。
  - グリーンの球体は、ビデオ パケット損失がゼロであることを示します。
  - オレンジの球体は、ビデオ パケット損失が 1 % を超えることを示します。球体の大きさは、ビデオパケット損失によって変化します。球体のサイズが小さい場合、ビデオ パケット損失が少ないことを示します。

図 *7 : Video Interarrival Jitter and Packet Loss* グラフ



球体（赤いアイコン）をクリックすると、システム、インターフェイス、フローの詳細が表示されます。

IP DSCP およびパケット損失

このグラフは、すべてのデバイスに表示され、次の情報を含んでいます。

- 縦軸（Y 軸）は、平均 IP DiffServ コード ポイント（DSCP）を示します。この値は、デバイスで事前に設定されています。
- 横軸（X 軸）にはパス トレースで検出されたネットワーク デバイスすべてがリストされます。
- グラフ内の球体は、ビデオ パケット損失の詳細をパーセンテージで表します。
  - グリーンの球体は、ビデオ パケット損失がゼロであることを示します。
  - オレンジの球体は、ビデオ パケット損失が 1 % を超えることを示します。球体の大きさは、ビデオパケット損失によって変化します。球体のサイズが小さい場合、ビデオ パケット損失が少ないことを示します。

球体（赤いアイコン）をクリックすると、システム、インターフェイス、フローの詳細が表示されます。

トラブルシューティング データのエクスポート

データをエクスポートできるのは、会議が終了した後のみです。トラブルシューティング ジョブが完了すると、[会議モニタリング（Conference Monitoring）] ページにトラブルシューティング ジョブのステータスが表示されます。

トラブルシューティング データをエクスポートするには、次の手順を実行します。

ステップ 1 **[診断（Diagnose）] > [セッション診断（Session Diagnostics）]** の順に選択します。

[セッション診断（Session Diagnostics ）] ページが表示されます。

Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

[診断（Diagnose）] > [会議の診断（Conference Diagnostics）] の順に選択します。

[会議の診断（Conference Diagnostics）] ページが表示されます。

ステップ 2 トラブルシューティング ステータスのアイコンに「トラブルシューティング レポートが利用可能（Troubleshooting Report Available）」と表示される、過去の[会議（conference）] を選択します。

ステップ 3 [ビデオコラボレーション会議（Video Collaboration Conference）] テーブルの [会議の件名（Conference Subject）] 列にマウス ポインターを合わせ、[360°会議（360° Conference）] ビュー アイコンをクリックします。

ステップ 4 [360°会議（360° SessionConference）] ビュー ウィンドウの [トラブルシューティングデータのエクスポート（Export Troubleshooting Data）] アイコンをクリックします。

HTML ファイル形式のトラブルシューティング レポートが新しいブラウザ ウィンドウに表示されます。

トラブルシューティング レポートのエクスポートを理解する

トラブルシューティング レポートをエクスポートすると、次の詳細情報が含まれます。

レポートのフィールド	説明
Conference Identifier	会議用の一意な ID です。
Conference Subject	会議がアドホック、スケジュール済み、またはスタティックかを表示します。
Conference Date	会議が行われた日付です。
Conference Start Time	会議の開始時間です。
Conference Duration in Minutes	会議の長さです。
Conference Type	会議がポイント ツー ポイントか、またはマルチポイントかを表示します。
Endpoints	会議の一部であったエンドポイントの詳細です。
Call Segment	トラブルシューティング中に使用された方向を表示します。

レポートのフィールド	説明
Troubleshooting Conference	トラブルシューティング ワークフローの開始時刻と終了時刻。
Troubleshooting Conference ID	トラブルシューティング ワークフローの固有ID。
Troubleshooting Start Time	トラブルシューティング ワークフローの開始時刻です。
Troubleshooting Initiation	トラブルシューティングが手動で開始されたか、自動的に開始したかを表示します。
Path Topology and Metrics	トラブルシューティングパストポロジとメトリクスについての情報を表示します。 フィールドとその説明は、次のとおりです。 • ホスト名/IPアドレス：ホスト名またはIPアドレスです。 • [CPU Utilization (Max, Avg)]：CPU 使用率の最大と平均を表示します。 • [Memory Utilization (Max, Avg)]：メモリ使用率の最大と平均を表示します。 • [Packet Loss (Video, Audio)]：ビデオおよびオーディオの最大パケット損失を表示します。 • [Max Jitter (Video, Audio)]：ビデオとオーディオの最大ジッターを表示します。 • [DSCP (Video, Audio)]：ビデオおよびオーディオの DSCP 値を表示します。
Troubleshooting End Time	トラブルシューティング ワークフローの開始時刻。
Troubleshooting Termination	トラブルシューティング ワークフローが手動で終了されたか、自動的に停止したかを表示します。

Cisco Prime Infrastructure のクロス起動

Cisco Prime Collaboration Assurance では、Infrastructure アプリケーションを使用してネットワーク診断を実行できます。Cisco Prime Collaboration Assurance では、Cisco Prime Infrastructure バージョン 4.1 および 4.2 がサポートされています。

Cisco Prime Collaboration Assurance で Cisco Prime Infrastructure を起動するには、Cisco Prime Infrastructure のホスト名とユーザ クレデンシャルが必要です。

前提条件：

- デバイスが Cisco Prime Infrastructure と Cisco Prime Collaboration Assurance アプリケーションの両方で管理されていることを確認する必要があります。
- ルータおよびスイッチに必要なすべてのクレデンシャルが Cisco Prime Collaboration Assurance に追加されていることを確認する必要があります。詳細については、『Cisco Prime Collaboration Assurance 用デバイスのセットアップ』を参照してください。
- Cisco Prime Infrastructure ソフトウェアのあるネットワーク デバイスが Cisco Prime Collaboration Assurance からアクセス可能であることを確認する必要があります。

Cisco Prime Infrastructure のユーザ権限に基づいて、Cisco Prime Infrastructure アプリケーションの次の機能を起動することができます。

- [デバイスビュー（Device View）]：ネットワーク デバイスのリアルタイム ビューを提供するグラフィカルなデバイス管理ツールです。これらのビューは、定期的に更新される、デバイス構成とパフォーマンス条件の物理的な画像を提供します。
- [接続されたホスト（Connected Hosts）]：アクセス スイッチに接続されているすべてのホストの詳細を表示します。
- [変更監査レポート（24時間）（Change Audit Report (24 hours)）]：過去 24 時間にデバイスで発生したすべての変更の概要を表示します。ソフトウェアイメージ、コンフィギュレーション ファイル、およびハードウェアに対する変更点が含まれます。
- [設定の表示/編集（View/Edit Configuration）]：アーカイブされているデバイスの設定ファイルを、未加工の状態および処理された形式で表示します。必要な権限がある場合は、コンフィギュレーション ファイルを編集することもできます。
- [障害（24時間）（Faults (24 hours)）]：過去 24 時間にデバイスでトリガーされたアラートとイベントの詳細を表示します。
- [Syslogメッセージ（Syslog Messages）]：デバイスでトリガーされた syslog メッセージの詳細を表示します。
- [システムパフォーマンス（System Performance）]：メモリ使用率、CPU 使用率、インターフェイス使用率、周辺温度、ポーリングの失敗など、デバイスのパフォーマンスパラメータをすべて表示します。

Cisco Prime Infrastructure のクロス起動

（注） **Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合**

[360 Integration] ページからの Cisco Prime Infrastructure のクロス起動は、Cisco Prime Collaboration Assurance 11.5 ではサポートされていません。

CCisco Prime Infrastructure のクロス起動を設定するには、次の手順を実行します。

ステップ 1 **[システム管理（System Administration）]** > **[360 Integration]** の順に選択します。

ステップ 2 [Cisco Prime Infrastructure セットアップ （Cisco Prime LMS Infrastructure Setup）] ペインに、必要な詳細を入力します。フィールドの説明の詳細 については、「Cisco Prime Infrastructure ペイン：フィールドの説明」を参照してください。

ステップ 3 **[保存（Save）]** をクリックします。

Cisco Prime Infrastructure ペイン：フィールドの説明

表 *4 : Cisco Prime Infrastructure* ペインのフィールドの説明

フィールド	説明
Cisco Prime Infrastructure サーバ	Infrastructure サーバのホスト名または IP アドレス。 Cisco Prime Infrastructureをマルチサーバ セットアップで展開した場合は、Cisco Prime Infrastructure のマスター サーバの詳細を入力する必要があります。
Prime Infrastructure のユーザとパスワード	Cisco Prime Infrastructure サーバに設定されているダミー ユーザ。 Cisco Prime CM サーバは、これらのクレデンシャルを使用して、Cisco Prime Infrastructure サーバと内部的にやり取りします。このユーザには、Cisco Prime Infrastructure サーバに対する管理関連の権限を割り当てないでください。